

読賣新聞

2012年(平成24年)

6月24日 日曜日



【リオデジャネイロ】河野博子、井上陽子「ブラジル・リオデジャネイロ」で22日閉幕した「国連持続可能な開発会議」(リオ+20)の成果文書は、具体的な目標や政策がなく、「成果」にはほど遠い結果となった。参加した環境団体メンバーや有識者からは厳しい批判の声が上がった。

国連の潘基文・事務総長は閉会式で「会議は成功に終わった」と話した。開催国ブラジルのルセフ大統領も各国代表団らへの謝辞を繰り返して会場は拍手の渦になった。

しかし環境保護と経済発展を両立させる「グリーン経済」について世界共通の工程表を作ることを断念。先進国と途上国の対立は解けないまま、すべての国が合意できた部分だけを並べた結果、283項目の内容

の薄い成果文書になった。

ブラジルの環境団体のアロン・ベリンキーさんは「とてもがっかりした。あるべき水準から相当低いレベルだ」と顔をしかめた。記者会見を開いた国際環境団体グリーンピース・インターナショナルのクミ・ナイドゥさんも「これでは、リオ+20ではなく、リオ・マイナス20だ」。国学院大の古沢広祐教授(62)も「大きな後退だ。日本政府が打ちだした環境未来都市も、人々が自然の豊かさの中で暮らしていく姿が見えず、魅力的でない」と厳しい。

20年前に同じリオで開かれた国連環境開発会議(地球サミット)は、地球温暖化を防ぐための気候変動枠組み条約や生物多様性条約の署名が始まり、歴史的な成果を上げた。それだけに、地球サミットから20年の節目となるこの会議への期待は大きかった。

会場の一角には22日、東

成果文書の骨子

- ▽グリーン経済は、持続可能な開発を達成するための重要な手法の一つ
- ▽全ての国に適用される持続可能な開発目標を策定するための政府間交渉を始める
- ▽国連持続可能な開発委員会に代わり、ハイレベル政治フォーラムを設置する
- ▽国連環境計画(UNEP)の機能を強化する

会場の中庭で行われた、被災地の子供の笑顔をアピールするパフォーマンス—河野博子撮影



消えた20年前の熱気

日本大震災被災地の子どもたちのほじけるような笑顔。をプリントした傘が並んでいた。NPO法人「メリープロジェクト」(東京)

の水谷孝次代表(61)は「もう大人はダメ。子供たちこそ、未来の希望」と、行き交う各国の外交官らに向かって声を張り上げていた。

国連最大級の会議は、力強いメッセージを発信することなく終わった。20年前の高揚感はなかった。

打ち出した「持続可能な開発」という言葉は、今や大衆や研究機関を中心に市民権を得ている。

会議では各国首脳が次々と出席をキャンセルした。先進国でやってきたのは、先月就任したばかりのフランスのオランド大統領だけだった。欧州は出口の見えない金融危機を抱え、世界

1992年の地球サミットは熱気が渦巻いていた。冷戦構造が崩れて現れた国際政治の空白を地球温暖化などへの関心が埋めた。その5年前に国連の委員会が

中に「環境どころではない」という空気が蔓延(まんえん)している。

中国は今や世界2位の国内総生産を誇り、高成長を続ける新興国であり、応分の責任を負うべき立場になった。温家宝(ウエン・ジァオ)首相が出席するなど存在感をアピールしたが、問題解決に向けての議論ではほほ沈黙を守り、消極的な姿勢に終始した。

一つしかない地球の環境には許容限界がある。環境NGO、企業、研究者らがこの原則を肝に銘じて行動を始めたことだけが救いだ。

(編集委員 河野博子)